The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜文献紹介＞Jakub Čapek 「ベルクソン的自由のアポリア」その他
Author(s)	平野, 一比古
Citation	メタフュシカ. 2006, 37, p. 103-108
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11683
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【文献紹介】
Jakub Čapek「ベルクソン的自由のアポリア」その他

平野一比古

原論文名は、Jakub Čapek, *Les apories de la liberté bergsonienne*（in *Annales Bergsoniennes* II, P.U.F., 2004.）である。フレデリック・ウォルムスの編集した『ベルクソン年報 I、II』（2002 年および 2004 年）を通じて、「自由」を表題にもつ唯一のものである。この論文では、主張内容の当否は別にして、短いながらもベルクソン哲学における自由に関して問題となりそうな論点が比較的適切に抽出されているように思われるので、紹介するものである。ベルクソン哲学の自由について、特に論じた仏語論文としては、この他に評者が気付いた範囲で比較的新しいものとしては、Guy Lafrance の「ベルクソンにおける自由と生命」（1991 年）、Jean-Louis Chédin の「『試論』における可能性と自由」（1990 年）がある。Jakub Čapek の論文を紹介したあと、そこでの論点に関係する限りにおいて比較の意味で、これら二つの論文についても触れることにする。

1　Jakub Čapek「ベルクソン的自由のアポリア」

「ベルクソン的自由のアポリア」では、著者は、結論的に言うとベルクソン的な自由の考え方に対して、ほぼ全面的に否定的な態度を取っている。ベルクソンは、自由を「事実」と考えているのに対し、「自由とは〈事実〉[1]ではなく、〈現象〉である」と著者は結論づけている。この結論に関しては、メルロ＝ポンティが再三援用されている。

さて、そう長いとは言えないこの論文は、前文に当たる部分と、「ベルクソンの学説の特異性」、「対照の効果（effet）[2]としての自由」の三つの部分からなる。

まず前文では、「ベルクソンは、自由の名で哲学的伝統と同じ事柄を理解していたのか」[3]という問いを立てる。この問題に答えるために、分離できない形で自由にしばしば結び付けられてい

1　原文の斜体での表現は <> で区切って示している。以下同じ。

2　ここでの対照は、のちに触れるように図と地の対照であるのでこの effet は結果ないしは効果の意を含むと考えられるものの、訳語としては効果として示すことにする。

3　*Annales Bergsoniennes* II, P.U.F., 2004., p.249.

る三つの観念を見ようとする。第一は、自由とは様々な仕方で行動できる能力であるということ、第二は、自由は行動における意図的な性格と一体をなすということであり、第三は、自由は個人に属するということである。これらの点とベルクソン的自由を対比することによって、ベルクソン哲学の自由の特異性に気付くことができると言うのであるけれど、著者は、こうした比較は同時にベルクソンに対する批判の出発点にもなると言う。

（1）ベルクソンの学説の特異性

a　選択の自由[4]

様々な仕方で行動できる能力としての自由とは、よくなされる言い方では、選択の自由（liberté du choix）である。著者は、ベルクソン哲学の自由は、可能的なものの間で選択するという可能的なものの観念を退けており、それは、〈選択の自由〉[5]ではないと明確に記している。自由とは、ベルクソンにとって現実的なものでしかない〈事実〉である。現実的なものと可能的なものの間の相異にかかわる＜能力＞や＜力＞ではない。

ただ、そう結論するまでにベルクソンにおける関連した表現を著者は、次に示すとおり追っており、興味深い。著者によれば、『物質と記憶』では、ベルクソンは日常的な選択において、ある形の自由をかすかにみる気になっている。すなわち、記憶は我々に幾つもの行動を可能的なものとして提示すると言う。『創造的進化』では、選択する能力を自由と同一視している。ベルクソンは可能的なものの間において選択する能力として、自由の観念を認めているように思われるからである。そのあと再び『物質と記憶』に戻り、自由が可能的なものの間において選ぶ能力であるという観念は実際的なものであると言う。さらに、そういった観念は我々から、次に述べる可能性を奪うと続ける。つまり、純粋な現実性である生成、可能的なものと実在的なものの間の差異なしで済ます生成について、生成への参加である限りの自由を知る可能性を我々から奪うと言うのである。かくして、可能的なものの間で選択する能力としての自由の認識は、《全く相対的》[6]であり、真ではないのである。このあたりの議論については、ベルクソンが選択の自由を認めているのかどうかが問題になるとき、参考に出来るものがあるだろう。

さらに幾つか、興味深い記述がある。著者が、ベルクソン的な自由について、可能的なものを自分の前に持たないでどのようにしてためらうことが出来るかと問い、ためらうのは《何の間において》なのか問うところである。《諸感情》[7]の間においてであると著者は記している。著者は感情的な動きの中で迷うといったことを考えているようである。また、ベルクソン哲学の自由は、前方から引かれるというよりむしろ後ろから押されると書いている。

b　意図的な行為

誰かの行動において意図（intention）を認めるとき、それを自由と名付けることができると著

4　節の区分は、紹介者が便宜のために区分したものであり、原文にはない。b、c、d についても同じ。

5　Ibid., p.253.

6　Ibid., p.252.　原文でも、《》で表わされている。以下同じ。

7　Ibid., p.252.

者は言う。この場合、《自由な（libre）》とは、《意図的（intentionnel）》あるいは《意志的（volontaire）》の同義語である。そして、こう続ける。暫定的に意図を次のように言おう。それは、私に依存している、可能的なものの状態（état de choses）との関係であり、そこにおいて私が私自身、そのものの状態が現実的（réel）[8]になることの原因であると断言できる、ものの状態との関係である。意図は可能的なものの表象なしには済まない。もし、可能的なものが現実的なものに先立たないなら、そのとき意図は対象を持たなくなる。そして、対象のない意図は考えることが出来ない。

著者によれば、これに対して、ベルクソンは自由な行為の構成要素として意図を退ける。自由な行為とは、意図を超える限りにおいて、つまり自由である限りにおいて、予測することが出来ないのである。ベルクソンにおいて、意図的な行為は自由な行為とは別のものである。

自由と意図をめぐり、伝統的な考え方とベルクソンの考え方の違いがかなりくっきりと出ているようなので、やや詳しく紹介した。著者の叙述によると、ベルクソンの自由は、「考えられない」もののようにも考えられる。この点についてはあとで触れる。

c　個人へ帰属する自由

一般的には、自由は個人に属する。しかし、ベルクソンにおいては、逆に自由に属しているのは私であり、自由は私を超えている。自由なのは私ではなく私を生み出した生命的な生成である。ベルクソンの自由の著者の、この説明は、当否は別にして興味深い。

a、b で見たように、ベルクソンにおいて自由な行為は可能的なものの間を行き来することからは生じないし、意図性（intentionnalité）[9]によって見分けることが出来ない。著者はなぜ、それを自由と呼べるのかと問い、自由な行為は非決定的だからだと言う。しかし、ベルクソンにとっては自由な行為は非決定的な生成以上のものだから、この理由では不十分である。そこから、人格の個性を表わすから自由であるという理由を提案すると言うのである。行為は人格の全体と、すなわち彼の過去の全体と一致すればするほど自由である。自由は、我々を創造し我々に独自な形を与える生成に一致すると、著者は続けるのである。だから、著者によれば、自由なのは私ではなく私を生み出した生命的な生成である。

d　自由の絶対的な性格

ここまで、著者は、通常の自由の観念との比較でベルクソン哲学の自由を明らかにしようとしてきた。このあとの部分では、著者は以上の考察から引き出せることを述べる。そして、これまでと違い、直接的に、ベルクソンの自由について述べる。それが、絶対的な性格ということである。

当否は別にして紹介すると、まず、ベルクソン的自由の概念は主体の責任についての考察において、いかなる役割も果たせないと言う。そして、自由の問題の道徳的な次元にベルクソン哲学は直接的ではない仕方で関連していることは認めるものの、著者は、実践的な、活動的な自由に対するベルクソンの警戒心ともいうべきものは、どこから来るのかと続ける。その理由の一つは、ベルクソン哲学は、あらゆるところで絶対的なものを相対的なものから区別しようとする傾向が

8　ここでは現実的と訳した。実在的と訳す方がよい場合もある。

9　意図を論じる文脈にあることから、こう訳した。

あるのに対し、行動の理由は、実際的、相対的な領分のものだということである。他の一つは、ベルクソンにとっては自由の基準が感情であり、自由は生きられるものであるということである。

しかし、著者によれば、これら二つの理由は一つにまとめられる。すなわち、ベルクソンの直接的なものへの偏愛である。感情、事実、純粋な現実性、生命性がそれである。直接的なものとは、ベルクソンの思想において絶対的なものの特徴である。これが、「自由の絶対的な性格」[10] である。

(2) 比較の効果としての自由

この節では、著者の理解するメルロ＝ポンティの現象学の立場からベルクソン的自由の概念のほぼ全面的といっていい批判がなされる。その論理が浮かび上がるように、以下紹介したい。

著者は次のように始める。我々が知覚するのは与件ではなく、意味である。メルロ＝ポンティは、これに関連して、ゲシュタルト心理学の概念を想起していると言う。《ひとつの地の上のひとつの図がわれわれの手に入れ得る最も単純な感覚的与件である。》《それは、知覚の現象の定義そのものであり、知覚上の“或る物”は常に他のもののただなかにある。いつもひとつの“領野”(champ)の一部分となっている。》[11] このメルロ＝ポンティの分析において、意味を与えるとは、地から際立つことであり、或る物のただなかにあることであり、ある領野、ある形状、ある構造に属することである。ここから、《直接的なもの》、《与件》としてのベルクソン哲学の概念の批判が続くということは明らかであると言う。まず《与件》についてである。《意識の直接的な“与件”への回帰は、望みのない作業となった。というのも、哲学的なまなざしが、それが原理的に＜見る＞ことが出来ない対象＜であろ＞うとしたからである。》次に、《直接的なもの》についてである。《変化してしまうのは、直接的なものの概念そのものである。印象、主観と一体となった対象はもはや直接的ではなく、意味、構造、諸部分の自然発生的な配列が直接的なものとなるのである。》[12] 著者は、《直接的なもの》、《与件》の否定をメルロ＝ポンティのこの部分から読み取ろうとしているようである。

そして、メルロ＝ポンティが自由について述べたところを引用する。《自由な行動がそれとして見てとられるためには、その行動が、かっての自由ではなかった、ないしあまり自由ではなかった生活を背景として浮かび上がるのでなければならないだろう。》[13] そしてこのあと、著者はメルロ＝ポンティは自由について考える際も彼の出発点から遠ざからないと言う。ゲシュタルト心理学的な図と地の対比がここにはあると言うのである。つまり、地と背景という相対的な対比の中にしか、自由はなく、絶対的な自由などないと言いたいようである。

しかし著者は、ゲシュタルト心理学を踏まえた現象学の意図は、単に意味についての構造化された、図と背景の対比といった性格を強調することにあるのではなく、図と地の可逆的な性格を

---

10 Ibid., p.256.

11 邦訳メルロ＝ポンティ『知覚の現象学』、竹内芳郎他訳、みすず書房、1967 年、30-31 頁。論文紹介の他の部分との関係等から、当訳文を参照しながらも引用者の判断で訳語を変更している場合がある。

12 同上　111-112 頁

13 同上　『知覚の現象学 2』、345 頁

示すことにもあると言う。図と背景はときおりそれらの役割を交換できる。そして、同じ行動があるときは自由の図として、あるときは自由がそこに際立つ地として現れ得る。既に示唆したように、結論として、自由が＜意味＞として現れねばならないとしたら、自由とはもはや絶対的ではあり得ないと言うのである。

さらに、ベルクソン自身が、彼自身の自由の概念を我々に理解させるために、図と地との、現象と領野との間での可逆的な働きを実際に利用していると主張する。つまり、事実としての自由は、選択の自由を地としており、自由な行為は、意志的な行為を地としており、生命性が自由として現れるためには、個人の自由を地としている。

著者によれば、自由は、それが現れる状況によってしか意味を持たず、自由は、事実の地位を決して持たない。感情が背景の地に際立つ、その背景なしに、直接的な感情はないということさえ示しうるだろう。求めなければならないのは、自由の＜感情＞ではない、自由の＜意味＞である。自由は＜事実＞ではなく、＜現象＞[14]である。著者は、ベルクソン哲学の自由を＜感情＞、＜事実＞の側にあるものと見ており、それに対して著者の理解した現象学の立場では、自由があり得るのは、＜意味＞や＜現象＞においてであると断定していると見られる。

２　その他

Čapek は、ベルクソンの「自由の絶対的な性格」を、ゲシュタルト心理学を踏まえた現象学の視点から、絶対的ではありえないと批判的に論じていた。

これに対して、ベルクソン哲学の自由を「自由の＜表現＞」と捉え、ベルクソンの自由に現代という時代における重い意味を見るように思われるのが、Chédin の「『試論』における可能性と自由」（1990 年）である。ベルクソンの自由には、「作品が、著者ともっぱら作品だけを表わすのと同様に、ある人格がその特殊な軌跡を表わし、それに署名する」「自由の＜表現＞」[15]があると言うのである。そして「ベルクソンは、個人にとっての新たな状況、ある意味で切迫した、古典主義者の知らない状況に立ち向かっている。」[16]と述べる。それは、「かって決してそうでなかったのに比べ、より困難な偏在的な社会的な状況の中で、個人が斯くあるものとして存在するために最終的に自らの中にエネルギーと潜在的能力を見つけなければならない状況」である。上に述べた時代的状況について、Chédin は具体的には書いていないけれど、「個人が斯くあるものとして存在する」ことが困難で切迫している状況がベルクソンの置かれた状況だと見ている。Chédin は、ベルクソンの自由が伝統的な自由と異なる理由をここに見ているように思われる。

Čapek が、ベルクソン的自由は、選択の自由ではないと単に指摘するだけに終わっているのに対し、Lafrance は、「ベルクソンにおける自由と生命」（1991 年）で、「反対のものあるいは可能的なものの間において選択する能力」[17]としての「自由意志（libre arbitre）」にベルクソンの自由

---

[14] Ibid., p.259.

[15] Jean-Louis Chédin, *Possibilité et liberté dans l'Esaai* in *Bergson : naissance d'une philosophie,* P.U.F., 1990., p.95.

[16] Ibid., p.96.

[17] Guy Lafrance, *La liberité et la vie chez Bergson* in *Revue Internationale de Philosophie.* 2/1991-n^{0}177-p.132.

が一致しない理由について二点述べている。一つは、ベルクソンにおいては、「革新的である連続性の中で絶えず修正される深い自我と、自由の同一視」[18] があるのに対し、いわゆる自由意志は、「自由行為の運動の中に断絶を導入する」ことである。選択する能力を考えるとき、そこに連続性ではない断絶が入り込むと Lafrance は見ているようである。他の一点は、「予め決定された可能的なものの間で選択が行なわれる」[19] ことである。「予め決定された」というところが恐らく問題なのである。

なお、Čapek が、『物質と記憶』に関して、ベルクソンは日常的な選択においてある形の自由を見る気になっている、すなわち我々の記憶は我々に幾つもの行動を可能的なものとして提示すると言っていた点に関し、Lafrance も自由と脳や記憶との関係について触れている。「自由は」、「ベルクソンが脳と神経系に認める役割が示すように体の機能と緊密な関係にある。」[20]「ベルクソンが、記憶と知覚の現象において働いているのを見るような自由は、空間と時間の中で展開され、かくして有機的な生を表現する自由である。その生が蓄積される過去を決して忘れることなく、選択し創造することからなる限りにおいて。」[21]

なお、最後に（1）の b で、ベルクソンの自由は意志的ではないと Čapek がほぼ断定しているのは、これも検討の余地があるように思われる。『試論』に限っても、内的因果を語るところで、努力感という表現が出てくる。直ちに明確にすることは難しいにしても、これは意志的なものに近くないであろうか。

（ひらのかずひこ　現代思想文化学・博士後期課程）

「キーワード」
自由、選択、絶対、図と地、現象

[18] Ibid., p.131.
[19] Ibid., p.132.
[20] Ibid., p.134.
[21] Ibid., p.136.